様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３２７０８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０２９０３

研究課題名（和文）南アジア・東南アジアにおけるELF談話スタイルの実態調査：英語発信力養成にむけて

研究課題名（英文）A Survey of ELF discourse style in South Asia and South East Asia: For improving English speaking ability

研究代表者
重光　由加（Shigemitsu, Yuka）

東京工芸大学・工学部・教授

研究者番号：８０１７８７８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：ELFの観点からアジア英語変種（インド・ベトナム）を対象にEELFとしての会話ストラテジーを抽出し、グローバル社会でELF英語を話す際に必要な異文化間相互調整能力への応用を試みるものである。インドとベトナムでそれぞれ現地の会社員および現地駐在の日本人の協力を得て、実験会話データ収集と言語環境に関する聞き取り調査を実施した。会話ストラテジーに関しては、聞き返しのストラテジーの指導が日本人話者の弱点として明らかにされた。また、社会・文化的背景や価値観の違いが、理解の妨げになっていることに当事者たちが気づいていない点も明らかになり、非母語話者同士の英語を視野に入れた言語指導の足掛かりとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
公用語としての英語の変種を話す国と、外国語として英語を話す国で現地アジア人と現地日本人の会話を収集し談話分析を行い、すでに持っている日本国内と英語圏で収集した会話データ80本とも比較を行い、英語母語話者の標準英語スタイルと異なる点に注目した。東南アジアでの異文化談話スタイル調査はほとんどなく、独創的な研究と言える。アジアの地域特性を持つ英語話者と話すときに特に必要な言語行動のストラテジーに注目した。文化・社会的背景に基づく談話スタイルの異なりは一般に認識されにくく、データの知見を英語教育現場に繋げることで、英語力向上に貢献できるところに意義がある。

研究成果の概要（英文）：Recently, the number of Japanese business people in South Asia and East Asia has been increasing rapidly. It is assumed that English is used as a main working language and is used as a lingua franca .Field work for this research was done in India and Vietnam. The researchers interviewed participants in India and Vietnam. The also recorded 15 conversation data between Japanese and Indians, and Japanese and Vietnamese. The common findings are that Japanese participants found that the English varieties used in both countries were is different from English that Japanese people have been exposed to, namely inner-circle-based English, as part of their schooling. not given language trained which is suitable for ELF interactions. Even some Japanese participants who speak English fluently sometimes had some communication problems in the context of ELF. The different skills, such as clarification technics, may be required more in ELF situations.

研究分野：異文化談話分析

キーワード：談話分析　リンガ・フランカの英語　異文化理解　南アジア　東南アジア　文化・社会的背景　英語教育　スピーキング能力

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究は南アジア・東南アジアにおける ELF 談話スタイルの実態調査を目的としている。日本での英語コミュニケーション研究や指導として目指すところは,Inner Circle との英語とのインタラクションを想定したものが主流であったと言えるだろう。しかし、実際には、近年の日本人の仕事相手・派遣先を見るとアジア等の英語の非母語話者とのインタラクションをする環境に置かれる人たちが増えている（注　コロナ禍前)。その中で、現地に赴く日本人社員からは、赴任先で使われている英語が日本での英語の授業で学んだり聞いたりした英語とは異なって苦労しているという声もあがっていた。発音の異なりによる聞き取り困難だけでなく、話すタイミングがつかめないという談話レベルに関した問題点もあげられている。

英語を母語としない人たち同士の英語使用は、リンガ・フランカとしての英語（English as a lingua franca)として研究がなされている。また、異文化コミュニケーションや異文化語用論の分野では、さまざまな文化背景を持つ者同士のインタラクション研究の中で、一般的に言う「話し方が違う」（会話のスタイルの異なり、談話の構造の異なり、反論の方法の異なり、ターン・テイキング・システムの異なり）ことが、違和感を生じさせ、意味の誤解よりも相手に対する不信感につながることも指摘されている（FitzGerald 2003 等）。

当該研究代表者と研究分担者は、以下の二つの科研費研究で、主に異文化語用論の領域で日本語と英語の初対面会話を 82 本収集し、談話の分析を行ってきた。第一は、「国際語としての英語の語用指標解明と英語教育への応用---英語ができる日本人の育成」（科研費基盤研究(C)課題番号 22520595 研究代表者　津田早苗）では、日本語と英語（Inner Circle）母語話者のそれぞれの自然談話のインタラクション方法を分析した。特に、日本語会話と英語母語話者会話ではインタラクション方法（会話の進め方）に大きな異なりが見られることが明らかになった。特に「話題の展開法」「質問の仕方」「回答の仕方」「自己開示」「応答（あいづち）と聞き返し」において違いが明らかであった。第二は、「日・英語の話題展開の手法：円滑な英会話のための社会言語能力の育成に向けて」（科研費基盤研究(C)課題番号 25370704 研究代表者　大谷麻美）である。この研究では、日本語母語話者と英語母語話者間の英語でのインタラクションの特徴を分析した。そこでは、日本語母語話者は英語を話す際も日本語のインタラクションで見られる方法を使用しており、そのために英語母語話者との会話がかみ合わず、ターンが奪われ、話題を展開できなくなってしまうこと、またこれが原因でインタラクションをせず聞き役にまわってしまうことが多いことが明らかにされた。

今まで実施した研究は、Inner Circle の英語母語話者との英語インタラクションを中心に分析されてきた。しかし、今後はアジア圏など英語をリンガ・フランカとして用いる(English as a Lingua Franca、以下 ELF)場合が増えるだろうと予想されるだろう。そこで、Inner Circle の英語母語話者とのインタラクションの研究成果が、アジアでの ELF 環境でも同様なことが言えるかどうか、また、新たに英語教育へ活かす側面があるかどうかを調べる必要があると考えたのが本科研費研究である。

２．研究の目的

前節でも述べたように、実際の英語使用場面として、日系企業全体の 70%が拠点を持つアジア地域での非母語話者間同士の英語使用が増えてきているにもかかわらず、その研究はあまり行われてきていなかった。そこで、本研究は下記のことを明らかにする目的で実施した。

まず、アジア各地域での日本人ビジネスパーソンの英語使用状況の上での問題点を明らかにするには、アジアの地域特性を持つ英語の会話データの収集が必要である。第一の目的は、今まであまり収集されてこなかったアジア地域と日本人の実際のインタラクションデータの収集と

英語環境の調査である。次に、インタラクションのデータを、過去の科研費研究（前述）で得たInner Circleとのインタラクションデータと比較し、アジアのELF環境でのインタラクションの特徴や問題点を抽出する。最後に、アジアのELF環境での予想されるコミュニケーション上の問題点を明らかにし、結果をもとに、英語母語話者とのELFコミュニケーションと、アジアでのELFコミュニケーションの両方に共通に見られる習得すべき談話ストラテジーと、地域特性を持つ英語変種の談話ストラテジーの分類を行い、多様な異文化コミュニケーションに対応できる異文化間相互調整養成の指導法（アクティビティを含む）を考案することが目的である。

３．研究の方法

研究は以下のように行った。

（１）研究対象地域として、インドとベトナムを選択した。実験会話データを収集するため、アジアに駐在している日本人や企業、現地の人の協力が必要であるが、この２か国で協力を快諾した企業や駐在員がいた。インドはカルタナカ州の日本企業に勤務する日本人と現地で日本人と働くインド人、ベトナムはホーチミン市の日本企業に勤務する日本人と現地で日本人と働くベトナム人に研究協力者として参加してもらうことができた。データ収集は2017年に行った。2019年にホーチミンで追加収集を行った。参加者には承諾書をとり、その際、英語の言い間違いは研究では扱わないことを確認した。インドは公用語として英語を使う国であり、ベトナムは外国語として英語を使う国であるという背景の違いも分析の際に考慮した。

（２）会話データの収集手法は、代表者がこれまで参加した科研費研究でイギリス・アメリカ・オーストラリアと日本で調査・実験研究手法を用い、精緻な比較分析ができるようにするため、まったく同じ条件で実施した。すなわち、初対面の2人以上の30分の英語で実施するインタクションである。実験会話の動画・音声を記録したのち、書き起こしをして分析資料とした。

（３）各調査地それぞれのビジネスの現場での、英語使用の有無、頻度、英語による異文化間のインタラクションの場面での困難点について聞き取り調査、またはそれに類似した方法（座談会）を用いて実施した。

４．研究成果

（１）インド人の座談会および聞き取り調査の結果は以下の通りである。インド人男性７名、女性３名を２つのグループに分けて座談会を開いた。彼らの職種は、日系企業従業員、非インド資本の企業社員である。彼らの母語は主にカンナダ語、タミル語、テルグ語であったが、共通の言語として英語を使用している。職場での言語は、複数言語が使われているが、どの職場でも英語は含まれ、日本人とのインタラクションで使用する言語は英語である。日本人とのインタラクションでの苦労として、日本人の発音がわかりにくいだけでなく、話すスピードも不自然（遅い）と感じることがあげられた。また、ことばが不足し、指示の背景や理由が理解できない点が多いことも指摘されている。談話の組み立てに関しても、日本人の話す説明の順が不自然と感じられていた。日本人の態度として、質問をすると自分で調べるように言われることや、インド人の話しを聞いていないのではないかと思われることがあるなど対人関係上の問題点も指摘された。日本語ができるインド人もいたが、仕事上の重要事項を除き、極力日本語で接することを試みているという経験を語るものもいた。

（２）インド勤務の日本人に対しては５名の協力を得、聞き取り調査を行った。彼らは、日本から派遣されている日系企業の駐在員、またはインド駐在体験を経てインドで起業をしてそのまま滞在している人たちであった。駐在員は技術系が多い。駐在員のインドの滞在歴は３－７年ほ

どだが、起業している人の中には通算 40 年ほどの人もいた。日本人の全員が、インド人の英語の発音がわかりにくいことと、日本で学んだ英語が通用しないことを指摘している。また、談話の組み立てについては、議論が派生した枝葉の方で活発化することがあること声が大きな人や職位の高い人の意見が受け入れられること、また、ターン・テイキングに関しては、３人ぐらいが同時に話すなど、インド人従業員とのインタラクションになじむことが難しいことが指摘された。

（３）ベトナム人への聞き取り調査はベトナムにある日本の製造業の会社と物流の会社の協力を得ることができた。調査した日系企業では会社独自の方針で言語や作業が異なる点が特徴的である。調査対象であった製造業の会社は現地に工場を持つが、オフィスでは日本語が使われている。一方、物流業の会社では英語しか使われていなかった。この会社では、ベトナム人従業員の英語の能力が高かったが、日本人社員に確実に伝わるように文書、メール、ホワイトボード、図･イラストなど複数の媒体で常にミス･コミュニケーションを防ぐ努力が必要だと述べている。

（４）ベトナム勤務の日本人への聞き取り調査は（３）で述べたように、会社によって異なっていた。会議も含めてオフィスで日本語を使っている会社では、ベトナム人も日本語ができる人が採用される傾向にある。会社としては特に方針は決めていなかったが自然とそうなったという話である。その結果、日本での留学経験があるなど日本語を生かした職につきたいという人が採用され続けている。ただし、その会社はベトナムのオフィス内では日本語であっても、他の海外支店（英語を公用語とするフィリピンなど）とは英語で仕事を行っている。一方、英語が中心の会社では、ベトナム人従業員も日本人の英語に慣れているので理解できているとのことであった。

（５）インド人と日本人の英語の会話の分析についての主な結果を述べる。日本人とインド人の 30 分の初対面会話を８組収集した。インドは英語が公用語ではあるが、インド人には家庭の言語や母語ではなく英語は第二言語である。収集したいずれの会話でも大きな特徴は、母語の自然談話や、一方が母語話者である異文化間のインタラクションに比べ、お互いの英語が聞き取りにくく聞き返しなどが発生していることがあげられる。聞き取り困難に対してインド人は質問をして推測やパラフレーズの手法を使い内容を確認しているのだが（全体の聞き返し表現の 67%）、日本人がそのような手法を使うことは 33%程度でパラフレーズに関してはほとんどない。それ以外は、日本人は ‘ Hmm? ’程度の聞き返しや、体を話し手の方へ寄せ、耳を傾ける仕草を用いて聞き取り困難であることを表明している例が 70%であった。しかし、そのような仕草がインド人にまったく理解されておらず、インド人側が日本人の発言開始を待ってしまい、インタラクションが止まってしまう会話例が頻繁に見られた。以前収集した Inner Circle の英語話者との異文化コミュニケーションの場面では見られなかったことである。

（６）本研究では、ベトナムとインドでの EFL 談話スタイルの実態調査を行った。訪問した企業も少なく、体験も個人レベルのものもあるので聞き取り調査や座談会で得た内容からの一般化は避けるが、興味深い結果があった。現地日本人駐在員が体験している英語環境の状況は Inner Circle の英語を話す人々と働く場合とかなり異なっていた。日本の英語教育では、グローバルな世の中では英語が必要と言われて久しいが、インドでもベトナムでも社内では日本語を使ったり日本語の通訳を探したいと言うのが本音でもある。インドのある日系企業の中には、現地従業員を来日させて日本語研修や受けさせたり、日本の価値観や風習を学ばせるという方針をたてているところもあった。

インタラクションの談話分析については、母語話者とのインタラクションに比べて、非母語話者同士の異文化間コミュニケーションでは相手の話しの内容や自分の理解を確かめながら進め

ることが必要であった。さらに、それぞれの母語や背景的文化が異なる場合は、自分の発話の根拠や相手への質問への的確な回答が必要なこともあきらかになった。非英語母語話者同士の交流がますます増えている現在、日本人が彼らと英語でインタラクションをする際に必要な英語力とは何かを改めて考える必要がある。さまざまな談話スタイルの存在を知り、異文化間の相互調整をする必要があると言える。これは、日本の英語教育の問題でもある。

<引用文献>

FitzGerald, H. (2003). *How different are awe? Spoken discourse in intercultural communication.* Bristol, UL.: Multilingual matter.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計26件（うち査読付論文　17件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　8件）

１．著者名 重光由加	４．巻 1
２．論文標題 質問行為に伴う配慮―初対面会話と親しい者同士の男性の雑談より―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本語の自然会話分析　BTSJコーパスから見たコミュニケーションの解明	６．最初と最後の頁 85，114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大塚容子	４．巻 1
２．論文標題 自然会話における感動詞「あっ」の機能ー日本語教育の観点から―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本語の自然会話分析―BTSJコーパスから見たコミュニケーションの解明	６．最初と最後の頁 139，160
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Yuka Shigemitsu	４．巻 1
２．論文標題 Being an active listener in unacquainted English conversations in Korean, Chinese and Japanese intercultural settings: a case study for thinking about teaching speaking skills	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Routledge Research in Language Education: Second Language Pragmatics and English Language Education in East Asia	６．最初と最後の頁 95，116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大谷麻美	４．巻 1
２．論文標題 日本人の英語会話に見る話題の展開方法：話題の積み重ねとラポール形成	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本女子大学文学部　文学研究科学術交流企画シンポジウム　第2回相互行為と語学教育　予稿集	６．最初と最後の頁 9，12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 重光由加	4．巻 41(2)
2．論文標題 インドの言語環境とELF使用場面から見る英語コミュニケーション能力―インド人と日本人のビジネス・パーソンへの座談会から―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 東京工芸大学紀要	6．最初と最後の頁 26-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 重光由加	4．巻 25
2．論文標題 聞き手による会話の修復とラポール:―談話分析的アプローチによるELF接触場面のケース・スタディ―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 言語処理学会第25回年次大会発表論文集	6．最初と最後の頁 838-841
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 大谷麻美	4．巻 42
2．論文標題 話題の終結と開始のための相互行為 －マルチモダリティーの観点からの分析－	5．発行年 2018年
3．雑誌名 社会言語科学会第42 回大会発表論文集	6．最初と最後の頁 137－140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大谷麻美	4．巻 21(1)
2．論文標題 日・英語の初対面会話における話題の連鎖と展開：共-選択の観点からの分析	5．発行年 2018年
3．雑誌名 社会言語科学	6．最初と最後の頁 96-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大谷麻美	4．巻 67
2．論文標題 日本語初対面会話における話題導入の相互行為―プロセスと対人関係機能―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 京都女子大学人文論叢	6．最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Murata, Yasumi	4．巻 2
2．論文標題 The need for explicit teaching of interactional skills: Cultural assumptions underlying English language interactions	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Meijo University Journal of the Faculty of Foreign Studies	6．最初と最後の頁 33-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊藤敏、大塚容子、鷲野嘉英	4．巻 43
2．論文標題 動画から顔の動きを抽出する試み―対話解析・修学行動評価への適用を目指して―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 教育システム情報学会第43回全国大会講演論文集	6．最初と最後の頁 401-402
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大塚容子、宇佐美まゆみ、伊藤敏	4．巻 25
2．論文標題 動画からうなずきの半自動検出と談話研究への応用	5．発行年 2019年
3．雑誌名 言語処理学会第25回年次大会発表論文集	6．最初と最後の頁 868-871
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Yuka Shigemitsu	4．巻 40-2
2．論文標題 Wh-(equivalent) questions for eliciting new information: A discourse analytical approach to Japanese male first meeting	5．発行年 2017年
3．雑誌名 東京工芸大学　紀要	6．最初と最後の頁 49-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Yuka Shigemitsu	4．巻 4-5
2．論文標題 Clarification requests in ELF interactions between Japanese and Indian people	5．発行年 2021年
3．雑誌名 JACET ELF SIG Journal	6．最初と最後の頁 3，23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計37件（うち招待講演　3件／うち国際学会　15件）

1．発表者名 Yuka Shigemitsu
2．発表標題 Clarification request in ELF conversation: A discourse analytical study of conversation between Indians and Japanese business persons
3．学会等名 World Congress of Applied Linguistics（国際学会）
4．発表年 2021年～2022年

1．発表者名 重光由加・岩田祐子・大谷麻美・大塚容子
2．発表標題 インドとベトナムの日系企業における日本人駐在員と現地社員との言語使用 及び インタラクションの実態調査
3．学会等名 The Japan Association of College English Teachers（国際学会）
4．発表年 2021年～2022年

１．発表者名 Yuka Shigemitsu
２．発表標題 An analysis of social talk in ELF interaction between Japanese and Indian people
３．学会等名 16th International Pragmatics Association（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 重光由加・宇佐美まゆみ
２．発表標題 インドの観光コミュニケーション会話の収集とその活用法
３．学会等名 第1回 語用論コーパス科研成果発表会 「『語用論的分析のための1000人自然会話コーパス』構築の趣旨と活用法」
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yuka Shigemitsu
２．発表標題 Clarification requests in ELF interactionbetween Japanese and Indian people
３．学会等名 JACET（大学英語教育学会）ELF　研究会講演会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Mami　Otani
２．発表標題 Interaction intopic-closing sequences: A cross-cultural analysis of Japanese and Australian English conversations
３．学会等名 16th International Pragmatics Association
４．発表年 2019年

１．発表者名 大谷麻美・岩田祐子・大塚容子
２．発表標題 英語インタラクション能力のための指導の試み：英語会話に積極的に参加できる学生を育てるために
３．学会等名 第59回大学英語教育学会国際大会（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 村田泰美
２．発表標題 Z世代を見据えた英語教育：「異文化理解」を通して生まれる「国際英語」への気づきと「異文化リテラシー」
３．学会等名 第59回大学英語教育学会国際大会（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 重光由加
２．発表標題 聞き手による会話の修復とラポール:―談話分析的アプローチによるELF 接触場面のケース・スタディ―
３．学会等名 言語処理学会第25回年次大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 岩田祐子、村田泰美、大塚容子、重光由加、大谷麻美
２．発表標題 待遇表現研究会　これまでの研究成果
３．学会等名 JAAL in JACET
４．発表年 2018年

１．発表者名 岩田祐子、村田泰美、大塚容子、重光由加、大谷麻美
２．発表標題 待遇表現研究会　現在進行中の科研研究
３．学会等名 JAAL in JACET
４．発表年 2018年

１．発表者名 大谷麻美
２．発表標題 話題の終結と開始のための相互行為 －マルチモダリティーの観点からの分析－
３．学会等名 第42回社会言語科学会研究大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 岩田祐子、大谷麻美、村田泰美
２．発表標題 英語インタラクションの指導の試み：成果と課題
３．学会等名 JACET中部支部春期定例研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 大塚容子、宇佐美まゆみ、伊藤敏
２．発表標題 動画からのうなずきの半自動検出と談話研究への応用
３．学会等名 言語処理学会第25回年次大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 岩田祐子
２．発表標題 日・英語初対面会話における関係構築の対照分析-聞き手の役割
３．学会等名 日本英語学会第36回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yuka Shigemitsu
２．発表標題 Different cultural norms and question-answer sequences: A comparative study between Japanese and English
３．学会等名 International Pragmatic Association（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 岩田祐子・村田泰美・重光由加
２．発表標題 英語会話におけるやりとり（インタラクション）をどう教えるか--会話データ分析に基づく実践的指導法と指導の試み
３．学会等名 大学英語教育学会待遇表現研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 岩田祐子・重光由加
２．発表標題 聞き手の役割に主眼を置いた英会話能力の養成--教材と指導法--
３．学会等名 大学英語教育学会（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

Politeness Research Group 活動記録 http://happy.ap.teacup.com/zunda/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	大塚　容子 (OTSUKA Yoko) (10257545)	岐阜聖徳学園大学・外国語学部・教授 (33704)	
研究分担者	岩田　祐子 (IWATA Yuko) (50147154)	国際基督教大学・教養学部・教授 (32615)	定年退職のため2020年度まで分担者。
研究分担者	大谷　麻美 (OTANI Mami) (60435930)	京都女子大学・文学部・教授 (34305)	
研究分担者	村田　泰美 (MURATA Yasumi) (70206340)	名城大学・外国語学部・教授 (33919)	定年退職のため2020年度まで分担者。

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関